
美術室のお月様

真雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美術室のお月様

【Nコード】

N9703Y

【作者名】

真雪

【あらすじ】

チャライ男子高校生と絵が好きな先生のお話です。

先生には、雨が似合う。広げたキャンバスに向かう背中につくシャツの皺とか、消しゴムに使うはずのパンをさりげなく口に放る横顔とか、俺がいつも目がいく先生の姿の後ろには、いつも雨音が流れていた。

「何見てんだ、また腹減ってんのか。」

「成長期だからね、仕方ないの。先生、一口ちょうだい？」

「お前が一口で済んだ試しなんかないけどな。見ての通り手え汚れてんだよ、勝手に食え。」

足元に置かれた食パンの袋に一瞬視線だけ送り、また黙々と手を動かす。岩みたいにごつごつしたこの手から、朝露よりも繊細な世界が生み出されるのが何度見ても不思議で仕方なかった。

掠れて無声音になったいただきますに、絵に夢中な先生は気づかない。自分の身じろぎひとつで先生の集中力が壊れてしまいそうで怖かった。美術室からは校庭がよく見える。底抜けに広がる空の青に、いつか先生がパレットの上で生んだ絵の具を思い出した。

「お前、どの季節が一番好き？」

「えー、そんな難しいこと聞かないでよ。だって春も夏も秋も冬も楽しいじゃん。」

半ば呆れたように笑いながらも、キャンバスから目は逸らさない。こつち見てくれないかな、と集中力スゲエな、が八対二ぐらいで胸中を占めていた。

「能天気って、お前みたいな奴を見て考えられた言葉なんだろうな。」

「しょうがないじゃん、日本に生まれたら誰だって一度はこう思うよ。あーでも、ひとつだけ選べって言われたら秋かな。」

「へえ、どうして。」

声が、好きだと思った。重心はきつと黒に近いのに軽やかで、先

生の描く世界にあつたらさぞかし映えるだろうなあと思いがらいつも聞いていた。

「春とか夏とか冬って、ひとつの季節として独立してるじゃん。秋は夏と冬の間のためだけにあるような季節な気がする。だから一番好き。」

炭のついた先生の手を見ていたら、明日から冬服なことを思い出した。学ランをどこに仕舞ったか、帰ったら探さないと。

「お前、やっぱり面白いね。」

キャンバスにぶちまけた色をそのまま宿したような瞳に見据えられ、ふいに高くなる鼓動に名前を付けられないでいた。美術の授業の受け持ちになってから半年が経って、こうして放課後を過ごすのが当たり前になった今でも。

「なあ、ちよつと描いてみない？」

「え？」

木材の古びた椅子が軋みを立てる。空いた席を顎で示され、恐る恐る座つてみるとその目前に詰められた世界に静かに圧倒された。

「すっげ……。」

感嘆の声が自分の意思と関係無しに洩れた経験なんて、それまで一度も無かった。

「何これ、これで食ってけんじゃん！なんで先生なんかやってんの、勿体無い。」

「バーカ、絵だけで生活してける奴は生まれた時から違いの。そういう星の下に生まれてんだよ。」

黒の濃淡だけで描かれた夜の森は、鬱蒼とした木々の緻密な葉が強く目を惹いた。平面なのにどこまでも奥行きがあつて、きつとヘンゼルとグレーテルはこんな道で迷子になったのだらう。それぐらい幻想的だった。

「ごめん、俺がキャブラーめっちゃ少ないから綺麗しか言えないや。でもほんと、なんていうか、見惚れる。」

「はははっ。」

先生の笑う吐息で揺れそうな葉っぱたちを見つめると、目の前に筆を出された。鮮やかな黄色い絵の具が付着している。

「・・・なに？」

「言っただじゃん、描いてみるって。上の方に、どこでもいいからお月様描いてみ。」

「いや、無理無理無理！」

のけぞって強く拒否するといかにもサディストっぽい笑みが広がる。にやにやと上げた口角が似合うなあ、と悠長に考えてる場合ではない。

「こんな綺麗な台無しにたくないよ、先生が一番俺の絵が酷いこと知ってるでしょ。」

「お前は技術が無いだけだよ。ここだけの話、感性は今まで俺が受け持った中でピカイチ。これはマジだから他の奴に喋んなよ。」
ぐりぐりと撫でられた頭から爪先まで、一気に熱が走るのを感じた。赤くなっている耳を隠すように筆を受け取る。

「知らないからな、どうなっても。怒らないでよ。」

「分かった、そこまで不安ならちよつとだけ手を貸してやろう。」
左肩に置かれて初めて、自分がどんな目でこの手を見ていたかを思い知らされた。

「まずね、お前はここに力入れすぎなの。こんな状態じゃ実力なんざ半分も出ねえよ。はい深呼吸。」

言われるままに息を深く吸う。強張った体の本当の理由に、先生はきつと気づかない。

「で、次は筆を動かすポイントな？」

そうして右腕を取られた瞬間、ちよつと手首あたりにこもった熱が爆発してばらばらに砕けてしまうかと思った。間違いなく、2秒は心臓が止まった。

「自分が今まで見た中で、一番綺麗な月を思い出す。そうだな、満月にしようか。誰と一緒にだったか、何を思っていたか、季節の匂いまで明確に。目、つぶってみ？」

「え、なんで。」

「技術は手に馴染ませるもんだ。見えない方が伝わることもあるんだよ。」

「言われるままに目を伏せる。」

「そう、いい子だ。」

熱が、声が、硬い肌の感触が薄い闇の中でリアルに伝わってくるのらりくらりと生活している怠け者の心臓を急に活発に動かしてはいけない。

「今からやる俺の動き覚えて。ちゃんと感覚で追えよ、したら目開けたときにはお前のものになってる。」

そう言っただけで先生は俺に手を重ねてゆつくりと弧を描いた。

「よし、こんなもんだな。続き描いてみ、今度は自分で。」

ぼつかり浮かんだ黄色い円枠は確かに本物の月のように優しい明かりを灯していた。黒と白だけの世界に落とした一滴の色が、こんなにも作品を変えてしまうことに感動する。

「中、染めるだけでいいの？」

「いいから好きにやってみな。」

キャンバスは心を写す鑑だと、どこかで読んだことがある。絵の技術も知識も全く無いけれど、これは先生が今まで見てきた様々な風景が凝縮されていることは分かった。どんな想いで、何を考えながら、誰と見てきたのかは知らない。

そこに手を加えることを許可された俺は、もしかしたら特別なのもかもしれないと思いついても許されるだろうか。

大きく一息ついて、差し出されたパレットに筆をつける。この月を最後まで描くことができたなら、先生に対する感情を今よりもっと鮮明にできる気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9703y/>

美術室のお月様

2011年11月29日03時49分発行